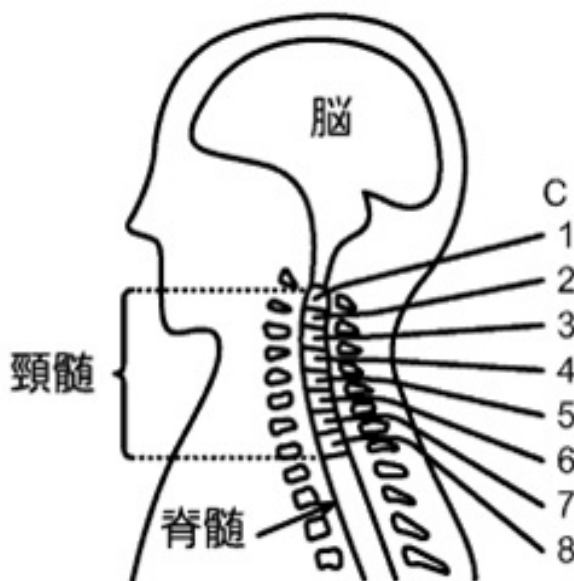


ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

(3)



〈参考資料〉大阪頸髄損傷者連絡会

<http://okeison.com/keison/keizui.gif>

中村周平

事故当日

今回は、事故当日の様子について触れていきたいと思います。いつもの日曜日に起きた突然の出来事。事故直後は私も家族も、そして高校の監督やコーチも現実をしっかりと捉えることができませんでした。

前回までと同様に、「私へのインタビュー」、そして、今回から両親と事故からの経緯について話し合った「両親へのインタビュー」も書き出していきたいと思います。事故直後の学校やラグビー部とのやり取りや入院中の出来事など、私が把握できていないことがたくさんありました。何より、事故直後の私の様子を一番知っているのは

両親で、二人の意見を聞く必要があることに気付きました。方法は、「私へのインタビュー」を両親に目を通してもらった後、事故直後に遡り、その当時の心境を語ってもらいました。そのとき交わされた会話の内容を手がかりに、当時の両親の心境についても書き出していきたいと思います。

以下、表記は筆者=S、北村さん(インタビュー)=I、父親=T、母親=Hとする。

1 「2002年11月17日」

やっとのことで自分のペースを掴めるようになった高校2年の11月、それは本当に突然の出来事でした。練習に出かける前に「あなた、これからもっとラグビー忙しくなるけど、進路どうすんの」「いくつか福祉が勉強できる大学があって、どこを目指そか考えてる」と、母親とこれからの進路について話をしていたのが、なぜが強く印象に残っています。その日はいつもと変わらない日曜日でした。前日の全国大会予選準決勝が先輩方の引退試合になり、その日は新チーム立ち上げの日。11月にもかかわらず、汗ばむような暑さの中、チーム内での紅白戦がおこなわれていました。

I: 「まず、事故が起こったのは練習中に起こったん？試合じゃなくて？」

S: 「練習中、紅白戦やったんですね。(中略)実は前日が先輩らが京都の全国大会予選の準決勝で、あの伏見工業高校に負けてしまって、新チームスタートの日やったんですね。だから、事故が起こる前は今年このチームでやっていくからってという話から始まって。で先輩の全国大会予選頃から、みんなちょっとずつ思った直接コンタクト(ぶつかること)のプレーの練習。普通は怪我しにくいように、タックルバック(相手のタックルを受けるクッション材)を手持ったりとか、コンタクトスーツ(着るタイプのクッション材)を体に身に

つけて痛みを軽減する、クッション性のあるものを身につけて受けてたんですけど(中略)でもそれやと実践的なものをやったりイメージできへんかったり、できへんというのが言われ出して...

I: 「試合にはそれ(コンタクトスーツ)使わへんのか？」

S: 「絶対に使わないです。(中略)コンタクトのところ課題があるんじゃないかって言われて。先輩らが最後の大会のあたりから、ぶつかるプレーが実践形式やなかったと。僕らの中にもそういう気持ちがあったので、監督からしょっぱなの試合やし気合い入れるわけじゃないんですけど、今回課題に挙げてたことを一回目からやってみようということで、紅白戦をやったんです。新チームスタートの日に紅白戦するなんて、今までなかったことなんですけど」

前チームの敗因は、「日々の練習において実戦的なコンタクトプレーの不足だったので」という考えに、私も共感してはいましたが、初日の練習から試合形式をおこなうことは全く想像していませんでした。

20分3本の試合、両チームの攻防が続きながら時間が経過していきました。「ここで少しでも得点に絡んで、新チームのレギュラー組に入りたい」、そんなことを頭の隅で考えていました。私のラグビー生活での最後の1年になるであろう、この年の最初の練習に、全力を注ぎたかったんだと思います。そして、試合終了5分前に事故は起きました。

I: 「なるほど。状況は練習試合した3回したやつが一番最後のところで？タックルにいったんかな？コンタクトになったん？」

S: 「まず僕らのチームがトライを取って、そこで一回プレーが止まって。トライ(得点)とったら、サッカーと同じでセンター(グラウンドの中心)からやり直すんですね。その蹴りだしたボールをとったやつが僕にパスをして...僕ボールを持って攻め込んでいって、相手の

チームのプレイヤー~タックルを受けて、そのままうつ伏せに倒れこんだんですよ」

I:「タックルを受けて、ボールを抱えたまま倒れこんだんや？」

S:「そうなる前にボールを活かしたいなと思ったんで、当たった拍子にポイって隣のプレイヤーにボールをパスしたんですよ」

I:「だからボールを持ってへんかったんや？」

S:「はい。試合自体は続いてて、バタっとうつ伏せに倒れこんで。試合が続いてたから立とうと思って、ふっと立った時に上からドーンと重たいものが倒れこんできて、その衝撃で首の骨がボキって。(中略)それで、めちゃくちゃ痛かったんで、とりあえず状況を確認したくて、周りに人がいなくなったんで、がばって上向いたらひゅっと体から感覚がなくなってって、地面に仰向けに空見上げたまま、全く体が動かない」

I:「動かへんかったん？」

S:「初めての感覚じゃないですか、首から上しか全く感覚がなくて。しかも、体を動かそうと思っても動かないんですよ。動くってというのがわからないんですよ、なんかどこに手、足があるのか分からなくて、半生首状態ですかね」

今まで経験したことのない感覚に襲われ、自分の体に一体何が起きたのか全く見当がつきませんでした。

監督やコーチ、チームメイトが「大丈夫、大丈夫」と声を掛けてくれたんですが、そうは思えない周囲の顔を見て、より不安を覚えしました。首の痛みは時間の経過に比例して増していき、全く動くことができないことに恐怖を感じていました。

S:「その状態でグラウンドに転がされてて、もうなんか痛みを通り越して怖かったというか、わけがわからないんですよ。確かに首の骨が折れたのは分かったんですが、そこからなんで手が動かへんのかなとか、普段やったら

ふっと体を起こせたのにそれが全く動かなくて。でもそうなった瞬間、試合はずっと続いてたんですけど、あいつ立ってこうへんと、おかしいぞってことになって、試合が止まって。ほんでいろんな人がパーって集まってきて、大丈夫かってなって「体が全く動かないです」って話になって。多分コーチや監督もそんな状況になったら今までの経験の中で、いろんな話を聞いてきた中で、これはやばいことになってるんじゃないかってことで、練習ストップで。すぐ119番しはったんかな、親にも連絡をしてはったような。その時はパニックってたので周りで何が起きているのかあまり分からなかった。でしばらくしてグラウンドに救急車が来て、担架に運び込まれたんですけど、担架で地面からふっと浮いた時自分の体が見えたんですけど、自分の体こうなっているんや、自分の体なのに変わすけど。今ちょっと感覚が戻ってきてて右腕とか左腕とか、わかるんですけど、その時は見てる手とか足が誰の手なのか、誰の足なのか、分からなかった」

「いつまでこの状態が続くんだ」、救急車が到着するまでの時間がとても長く感じました。ようやく救急車が到着して担架に乗せられた際に見た私の腕や脚は、それはあたかも他人の腕や脚のように思えたほど感覚が乖離していました。

そして、コーチから連絡を受けたとき、母親は昼食の準備をしていて、父親は床屋で散髪してもらっている最中でした。本来なら高校近辺で首の手術ができる医師のいる病院に運ばれる予定だったんですが、日曜ということで不在、次の搬送先が見つからずなかなか救急車が出発することができませんでした。連絡の末、京都市の伏見区にある第一赤十字病院で首の手術をおこなえることがわかり、ようやく高校のグラウンドを出ることができました。

S: 「僕がグラントで事故に遭ってコーチから母の携帯に電話があったと思うんだけど」
H: 「お昼すぎに電話があって、コーチから練習中に『周平が首を負傷しました、意識はあるけど、手足にしびれがある状態です。救急車を呼んだんですけど、搬送先がまだ決まらないので、決まり次第連絡します』っていう内容やって、『おそらく洛西シミズ(成章高校の近く)だと思う』ということやったので、その日は大阪に住んでいる祖父のところで生活していた長男が帰ってきていて、こういうことやからということで、私は洛西シミズに向けて走りだしたんやけど。駐車場に着くときにまた携帯が鳴って、まだ運転してる途中で出られなくて。留守録に『今、周平の救急車を追っかけてるんですけど、洛西シミズの前を通過した。行き先が決まり次第また連絡します』っていう連絡が入って。でしばらく待ってたら、部長さんから電話掛かってきて『行き先が第一日赤に決まった。書類上の処理が必要なので周平の生年月日を教えて欲しい』っていう...救急車の中から付き添いながら連絡してくださって」
S: 「その時、父はどうしてたん？」
T: 「ちょうど散髪屋に行っていて、家に帰ろうと思ったら、母から電話があった今言ってみたいなことが...あっその前にメールが入ってて、『周平が首をやったらしい。意識はあるけれども手足に麻痺がある。今後、後遺症のことが心配』っていうメールと思うわ」
H: 「とりあえず、第一日赤にいるっていうことをメールしたと思うわ。いくら電話しても出られへんかったんで。父が『第一日赤』っていうのを見たときに『周平は死んだな』って思った。すごい重症、日赤に運ばれるっていうのは父の中では重症やというっていうのがあって。これはもしかしたら、命に関わるんかもしれんって思ったんやっていうのは、あとで言ったね」
T: 「言ったた」

この事故があった「2002年11月17日」は、私もそうであったように、両親にとっても普段と何も変わらない、いつもの日曜日でした。

2 主治医からの宣告、手術を経て

病院に運ばれた当初、私の記憶は大きく錯綜していました。

I: 「病院に着いてすぐ手術？」

S: 「それがまた、偶然なんですけど、その日たまたま京都でもうひとり首やった人がいて、僕よりちょっと早くその人が運びこまれたんで」

I: 「待たなあかんかったん？」

S: 「8時間くらい首固定されたまま寝かされました。MRI撮ったり、担架で運ばれたり、あと着てたジャージをハサミで切られたような、救急車で運ばれた時は断片的な記憶しなくて。目が覚めたら、MRI室に運び込まれてたり、また目が覚めたら寝かされてるベッドの横にその日一緒に練習していたメンバーが心配して見舞いに来てくれたり、『大丈夫か？』みたいな。ちょっと話をしただけでまた寝てしまって。気が付いたら、そこから完全に記憶が飛んで、何日かあとの事しか憶えていないですね」

I: 「なるほど、手術室を出てICUとかに入るとかの記憶はもうないわけや？」

S: 「親とかは喋ってたとか言うてたんですけど。喋ってた記憶が全くなくて」

それは現在でも、ここに書き出したこと以上のことはほとんど思い出すことはできません。

また、手術後の集中治療室での記憶も断片的なものしか残っていませんでした。中学の同期が見舞いに来てくれたことも、私は事故の翌日だと認識していたんですが、既に数週間も経っていたことを後に両親から聞くこととなりました。はっきりと覚えている「病院での記憶」の

最初の部分は、集中治療室を出る前日でした。

そして、両親がともに病院に到着した後、手術を担当する医師から「息子の障害」について話がありました。数枚のMRIの写真を見ながら、淡々と「息子の障害」の状態を説明していく医師。しかし、その話の内容がもつ重大性や、今後、障害を持ちながら生きていく上での「社会的な」困難について触れられることはありませんでした。

S:「その主治医からの話って後からどんなんやったかって聞いたけど、その話を聞いたときってどうやった？」

H:「とりあえずね、『第四頸椎脱臼、第五頸椎骨折、首からは完全麻痺』『緊急で首の固定手術をするけれども、回復の可能性は文献上7%、手術をしたらできるだけ早くリハビリを始めて、3ヶ月以内にリハビリ専門病院に転院して、そこで社会復帰に向けてのリハビリを』って言う話がたんたんと...ホンマにたんたんと。今から思えば、そうするしかなかったんやろうと思うねんけど、当時は『あなた(主治医)が私ら親に伝えてることは、この子(周平)の一生にとって重大なことなんやけど、重大性を帯びてない話し方をしはるから、理解できない。この人の人生には取り返しの付かないことなんやけど』って」

S:「一つ一つ重く受け止めてたら、これから手術する精神力とかがなくなって」

H:「常にそういう人を担当してる脊髄専門の先生やから、こういう怪我をしたらこうなるのは周知の事実やったりするんやろうけど、やっぱり家族にとったらそんなこと2回もあることではないので、あまりにもたんたんとしてるのがしんどかった。運動神経も、知覚神経も、自律神経もみんな傷ついてるからって。母の記憶では、父が途中で気分悪くなって『うっ』ってならはって。ほな『大丈夫ですか？気持ち悪かったら他の人に聞いてもらいますからいいですよ』って言われて、そ

れもそれで。事が大きすぎて受け止められてなかったって、後から思うとね。それが事実として重みを帯びて、客観的にもものすごいことと言われてるってわかってても、その重大性をホンマにはわかりきらんまま、話を聞いたような気がする。監督らは泣き出すし、逆に私らがなだめてた。『先生らの責任ちゃうし』」

NPO 法人日本せきずい基金理事長大濱眞氏は、第2回日本再生医療学会総会特別シンポジウムにて「人生の途上の一瞬の事故がもたらしたものの、それは人間の『社会的な死』に等しいのが現実である」と述べています。

ある日の突然の事故によって、食事や着替えなど、それまで自分一人でおこなっていたことを誰かに頼まなければならない現実には「社会的な死」を与えられたことと等しいことで、それは家族までも介護の生活に取り込まれてしまう現実でもあるのです。医師は家族に「事実」を伝えるという医師として当然の役割を果たしましたが、そのことを家族やラグビー部の監督、コーチは正面から受け止めることができませんでした。それは、その場にいる誰にとっても、受け入れ難い事実でした。